

# 故事成語「杞憂」確認テスト（列子） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

問1 杞国に人有り、天地の崩墜して、身の寄する所亡きを憂へ、寢食を廃する者あり。／「亡」は「無」に同じで「～が無い」の意。「廃寢食」は「寢食を廃す」と読む。

問2 天は、積気のみ。処として気亡きは亡し。／「耳」は「のみ」と読み限定（～だけだ）を表す。「亡処亡気」は「気の無い場所が無い（どこにでも気がある）」の意。

問3 「身亡所寄（身の寄する所亡し）」の「亡」。〔いずれも「無」に同じで「～が無い」の意。「亡処亡塊」の「亡」も可〕

問4 奈何ぞ崩墜を憂へんや。／「奈何」＋「～んや」で反語。どうして…か、いや…ない。

問5 疑問・反語を表す句法で、「奈何（いかん）」という。「奈何」は「どうして…か」「…をどうしよう（か）」の意を表し、「奈～何」のように間に語を挟む形（奈地壊何＝地の壊るるを奈何せん）でも用いられる。

問6 イ（仮定。「たとえ落ちてきたとしても」の意。「只使…」で「たとえ…としても」と訳す。）

問7 杞の国に、天地が崩れ落ちて、自分の身を置く場所が無くなることを心配し、寝ることも食べることもやめてしまう者がいた。

問8 そこで（その人のところへ）出かけて行って、その人に道理を説いてさとして言うことには。

問9 天は気が積み重なってできたものにすぎず、気の無い所など無い（どこにでも気がある）。だから一日中その天（気）の中で体を動かして暮らしているのであり、崩れ落ちる心配などないと説明している。

問10 日月星宿も気の中で光り輝くものにすぎないので、たとえ落ちてきたとしても、人に当たって傷つけることはできない（害はない）と言っている。

問11 地は土くれが積み重なってできたものにすぎず、四方の空間にすきまなく満ちていて、土くれの無い所など無い。だから一日中その地の上で体を動かして暮らしているのであり、壊れる心配などないと説明している。

問12 どうして（天が）崩れ落ちることを心配するのか、いや、心配する必要はない。

問13 その（杞の国の）人は、わだかまりが解けてすっきりとし、大いに喜んで。

問14 (1)崩れ落ちること。(2)寝ることと食べることをやめてしまうこと。(3)道理を説いて分からせること。さとしこと。(4)なんじ。あなた（の意の二人称）。(5)わだかまりが解けてすっきりするさま。

問15 天や地が崩れ落ちて、自分の身を置く場所が無くなってしまわないか、ということを心配した。

問16 地が壊れる（崩れる）こと。〔「地の壊るるを奈何せん」〕

問17 二人とも（杞の国の人も、さとした者も）わだかまりが解けてすっきりとし、大いに喜んだ。

問18 無用の心配。取り越し苦労。起こるはずのないことをあれこれ心配すること。

**問19** 出典＝『列子』。学派＝道家（老莊思想）に分類される。

**問20** ア（起こるはずのない事をあれこれ心配するのは無益であるという、まさに「杞憂」の教訓。）

**問21** （例）明日の遠足が雨になるのではと一週間も気に病んでいたが、当日は快晴で、まったくの杞憂に終わった。